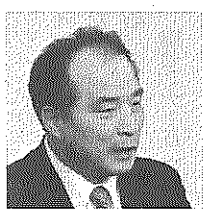
日本アグフア
速乾セミナー開く
「アズーラTS」で実演も

日本アグフア・ゲバルト㈱（本社・東京都品川区、松石浩行社長）は、4月9日、ホテルニューオータニ博多で速乾印刷セミナーを開催した。九州地区の印刷会社を中心に約90人が参加したこのセミナーでは、㈱東京テックプラス（本社・埼玉県朝霞市）の加藤隆行社長を講師に招いたセミナーに続き、㈱トータルプルーフ（本社・福岡県福岡市、河瀬待希子社長）で速乾印刷の実演を行った。

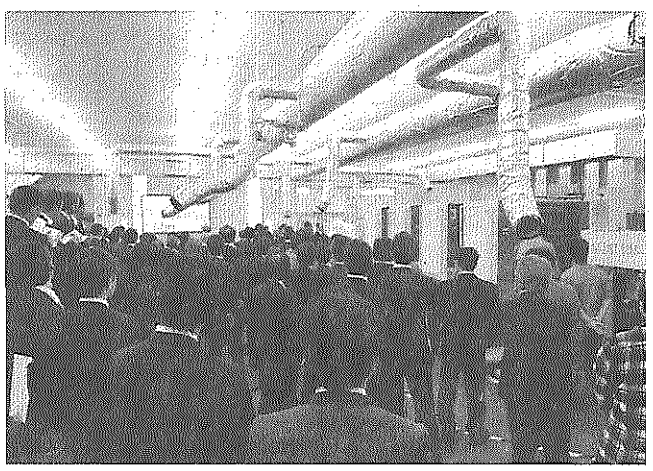
セミナーの冒頭、あいさつに立った同社の松石社長は、「東京テックプラスの加藤社長にコンサルティングをお願いして、印刷が劇的に変わった会社が何社もある。経営者にも現場の人にも必ず有益なセミナーとなるだろう。さらに、速乾印刷の実践に現像レスプレート〝アズーラTS〟が貢献できることを嬉しく思う」と述べた。

また、アグフアグラフィックス アジアパシフィックのティム・ヴァンデンボッシュ代表責任者は「われわれは、今後もオフセット印刷技術が業界の主流であることに変わりはないと考え、現在2つの技術に力を入れて開発投資をしている。1つは〝アズーラTS〟をはじめとするプレート技術、そして2つ目はワークフローの自動化だ。九州地方でも〝アズーラTS〟を多くの印刷会社で導入してもらっており、これからも重要拠点としてフルサポートを約束するとともに、ユーザーの皆さんがさらに発展することを期待している」と話した。


松石社長

河瀬社長

加藤社長


実演のようす

セミナーでは、多くの印刷会社で「3分間乾燥印刷法」の技術指導から経営面に至るまで幅広くサポートを行っている東京テックプラスの加藤社長が「速乾と汚れのない印刷を目指し」を演題に講演した。

加藤社長はまず、小ロット化による売上減少、資材価格高騰、短納期・低価格化、育たぬ人材といった印刷業界が現在抱えている問題の解決策として速乾印刷が有効であると紹介。そして、速乾印刷を行うためには印刷機のメンテナンスが何よりも重要であり、印刷機のメンテナンスを日頃から自社でしっかりと行うことで、①整備にかけるコスト削減、②印刷機の寿命を延ばす、③品質が安定、④マシンの現状把握、⑤社員のモチベーションアップに繋がる――ということを力説した。

また、真のリストラとは慣習を撤廃することであり、適正濃度での印刷、ローラー調整、湿し水の管理をコツや勘に頼ることなくきちんと数値に基づき行えば適正濃度で印刷でき、インキを盛り過ぎることなく速乾印刷が実現できると解説した。そして速乾印刷による短納期化が受注拡大、残業削減、収益アップを生み出すことで現場力向上に繋がり、無駄を排除していくことで「昭和の印刷から平成の印刷」へ進化しなければならないと結んだ。

また加藤社長は、「アズーラTS」は現像レスを実現するために採用された先進の砂目構造により水を絞ることができ、それによって網点がくっきりと美しくなり、同じインキでも艶が出る、乾燥促進にも貢献するといった効果が得られることも指摘。参加者達はオフセット印刷の原点に戻り、日頃のメンテナンスと水を絞ることの重要性に改めて気付き、熱心にセミナーに聞き入った。

セミナー終了後、トータルプルーフに移動して、速乾印刷の実演を行った。トータルプルーフは平成3年に創業し、昨年10月からアグフア社製のサーマルCTP「アバロンN8」および現像レスプレート「アズーラTS」を採用し、水を絞った印刷に挑戦してきた。

実演では、110キログラムのコート紙に重い絵柄のポスターを、インキつぼを触ることなく印刷をスタート。刷り出しから10枚足らずで色出しができていることを確認後、徐々に印刷機の回転を上げていき、最高速の1万6000回転で運転。印刷後20分ほどで断裁を行い、裏付きがないことを証明した。続いてスーパーユポ紙で、白地が一切ない絵柄の印刷を行った。

注意
市場対応

小森コーポレーション（以下

世界規模での戦略的提携に

プロセスを用いたデジタル印刷

膜厚の半分であり、ランダ・ナノインクは業界でのデジタル画像形成において、ページ単価を最も安くすることを可能とする。

これらすべては水性インクであり、エネルギー効率が良く、環境に優しいプロセスといえる。

ランダのベニー・ランダCEOは、「コモリが次世代デジタル印刷機にナノグラフィの採用を決断されたことは、この革新的な技術の進歩と、印刷産業の新しい業界標準となる可能性を高めるための、非常に重要なマイルストーンとなり得る」と期待を寄せる。

小森善治コモリCEOの話　小森コーポレーションは永年にわたるオフセット印刷機械の専業メーカーとして、商業、パッケージ、証券などの市場に対し、広範囲な印刷物を生産することができる印刷システムを供給してきた。私どもは、バリアブルデータ／パーソナライゼーション印刷、とくにニッチな用途に関する需要拡大の必要性を感じている。

これらに対して、すでに発表しているとおり、デジタルオンデマンドソリューションでの対応を進めている。

しかしながら、ますます増加するユーザーのさらなる小ロットおよび短納期への対応要求が同様に存在する。これら商業印刷市場の要求に対応するため、今回、次世代枚葉およびオフ輪の水性インクを用いたデジタル印刷システムの強力なソリューションとして、ランダ・ナノグラフィ印刷の採用を決断した。

この決断は顧客からの未来に向けたさまざまな要望に応えたいという、コモリの新しいポリシーである〝PRINT ENGINEERING SERVICE PROVIDER〟にも合致するものである。

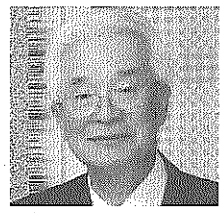
ベニー・ランダCEOの話　私どもは新しいナノグラフィ枚葉印刷機の紙搬送機構の供給者として、コモリと親密な関係を築いてきた。コモリはわれわれの技術を最初にお見せした企業であり、ビジョンも最初に共有した企業でもある。

コモリがこの巨大な市場でのビジネスの機会を共有する、世界規模の戦略的提携を行うことを最初に発表できる企業であることを喜んでいる。印刷業界とその広範な参入市場における重鎮として、コモリはランダ・ナノグラフィ印刷の世界的導入を加速させるための存在である。

◇

ランダコーポレーション　〝デジタルオフセットカラー印刷の父〟として知られるベニー・ランダは、1977年に技術開発会社であるインディゴを設立。そこで開発した液体インクを使ったデジタル印刷システムE-Print1000を1993年に発表した。ヒューレット・パッカードにインディゴを売却した後、2002年にランダコーポレーションを設立。ランダコーポレーションは、ランダデジタル、ランダラボ、ランダベンチャー、ランダファンドの4つの事業から構成されている。

はなやかに50年展
熊沢印刷工芸
スクリーン印刷〝再発見〟


熊沢氏

熊沢印刷工芸㈱の創業50年の歩みを過去製作したポスターとともに振り返る「熊沢印刷工芸スクリーン印刷50年展」が4月23日から28日まで、東京都台東区の日展会館ギャラリーで開かれた。B全判・B倍判70点のポスターが一堂に会し、オフにはないスクリーン印刷の表現力を再発見する場となった。初日に開かれたパーティーには内田徳男氏、吉田弘氏、浅野健氏などスクリーン業界内外の重鎮のほか、デザイナーの勝井三雄氏もかけつけ、熊沢氏と50年にわたる旧交を温めた。

熊沢印刷工芸は1961年に創業以来、一貫してグラフィック分野のスクリーン印刷にこだわり、数々のポスター作品を手がけてきた。今回もスクリーン印刷によるイラストの表現力や温かみが伝わるポスターがそろった。今回は名前は伏せられていたが、日本を代表するデザイナーの作品も多くみられた。

70点のポスターが一堂に

デザイナーの勝井氏もその一人。オープニングパーティーの来賓あいさつに登壇した勝井氏は「私は1958年に写真製版によるスクリーン印刷の作品で若手の登竜門といわれる賞を取り、デザイナーの道を歩んできた。作品にはデザイナーの思いを形にしようというスクリーン印刷の技術者の気持ちが詰まっている。そういう意味で私は熊沢さんとともに歩んできた。年も熊沢さんと同じだけれども、これからも一緒にやっていきたい。

モトヤから新書体
「装飾ラインシリーズ」

㈱モトヤ（本社・大阪市、古門慶造社長）は、アポロ・シーダ・マルベリ・バーチをベースに装飾効果を施したライン、シャドー、エンボスの3シリーズから成る「モトヤ装飾フォント」を発売した。

△モトヤ装飾ラインシリーズ▽ラインは強調された縁取り効果を持つ書体。シンプルなデザインがWebなどで威力を発揮。△モトヤ装飾シャドーシリーズ▽影付き効果を持つシャドーはとくに広告分野に適して

を利用することなく、カタログ・チラシやWebなど幅広い範囲で簡易で効果的な演出が可能。フォーマットは、TrueType（ウインドウズ2000／XP／Vista／7）、OpenType（ウインドウズ2000／XP／Vista／7、MacOS9／X）で、文字セットはJIS X0208（90ms＝非漢字、第1・2水

WebEXPO